共立女子大學 文藝學部報

共立女子大学文芸学部報
第131号
発行日　2019年4月1日
編集・発行　共立女子大学文芸学部
〒101－8437
東京都千代田区一ツ橋2-2-1
発行責任者　深津謙一郎
創刊　1968年12月
題字　遠藤慎吾
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・ご感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。
gakubuho@kyoritsu-wu.ac.jp

学部報は共立女子大学公式ＨＰの「文芸学部」のコーナーでもお読みになれます。
http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/

飼いならす *apprivoiser*

山本聡美

難しい本

人生で初めて自分の意志で手に取った本がサン＝テグジュペリの『星の王子さま』（以下引用文は全て、内藤濯訳、岩波書店）だった。

グレーの表紙の小さな本と私を見て、母が「あなたにはまだ難しい本」と言ったことを、鮮明に覚えている。子供向けのお話と絵がぎっしり詰まっていて分厚い私の蔵書に比べると、母の本棚に並んでいた、そのはかなげな本が、到底難しそうには見えなかったからである。

実際開いてみても、ゾウやキツネは出てくるし子供が主人公だし、どう難しいのか分からないまま読み進めていくと、そこに「飼いならす」という不思議な言葉を見つけた。

「おれ、あんたと遊べないよ。飼いならされちゃいないんだから」と、キツネがいいました。「そうか、失敬したな」と、王子さまがいいました。でも、じっと考えたあとで、王子さまは、いいたしました。「〈飼いならす〉って、それ、なんのことだい？」

旅の途中で出会ったキツネと会話するというピースフルな情景に、「飼う」や「馴らす」といった動詞が不似合いであるように思い、それ以上深く考えることも当時の私にはできずに、確かに「難しい」まま、その本とはなんとなく疎遠になって過ごしていた。かれこれ四十年もの間。

二〇一八年夏

高校生向けのオープンキャンパスで、仏文コースの武藤剛史先生（二〇一九年三月にご退職）が『星の王子さま』について模擬授業をなさった折、ふと「飼いならす」について、あれは昭和の翻訳者の一風変わった言葉遣いだったのだろうかと質問してみた。

すると武藤先生は即座に、原文も同じように、読み手をどきっとさせるような違和感をはらんだ表現なのだと教えてくださった。

その瞬間、私の中で何十年も眠っていた小さな思考の種が水を得て、飼いならす *apprivoiser* という言葉が、人間と自然、人間と人間、人間と社会、あらゆるものたちの間に存在する大切な相互作用を言いあらわしていたことを理解した。

思いつくまま、教員や助手たちにあれこれと質問していくうちに、*apprivoiser* をどう日本語に訳すか、実は既に議論の蓄積があって、現在十数種類が出版されている新訳版では、異なる表現も採られていることなどを教わった。

ちょうど同じ頃、日本中世の四季絵や和歌について考えねばならない機会があったこととも重なり、自然を飼いならし、同時に自然から飼いならされることで育まれた日本の文学や芸術に関する思考へと飛躍していった。

美しい桜や紅葉を描いた屏風絵も、「見わたせば花も紅葉もなかりけり……」と詠った藤原定家も、本来荒々しい自然を飼いならし我がものとすることで美のひとしずくを抽出した。同時に、自然を畏怖しそこに神の姿を見出した。

人間は、ニワトリを飼っている

「人間を探している」と言う王子さまに対して、キツネが自身の人間観を示す。

「人間ってやつぁ、鉄砲もって、狩をするんだから、おれたち、まったく手も足もでないよ。ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかには、人間ってやつにゃ、趣味がないときてるんだ。あんた、ニワトリさがしてるのかい？」

キツネの思想は、徹底的にプラグマティックで小気味良い。キツネという異類の視点が、私たちの実態が行為の連続としてのみ捕捉し得ること、また私達の歴史が、過去に行われたことの総体としてのみ存在することについての、哲学的思考を喚起する。

私は、「何を飼っている」者であるのか。

めぐる四季

地球から、もといた星へ帰っていこうとする最後の場面で、王子さまはこう言う。

「今夜で一年になる。ぼくの星は、去年、ぼくがおりてきたとこの、ちょうど真上にくるよ……」

星が一回転、つまり四季が一巡し一年が経過することが、この物語を駆動する大切な仕組みである。去年と同じ場所に同じ時間に立っていたとしても、一巡を経た自分は、もとどおりの自分ではない。

龍宮城から故郷の浜辺に帰還する浦島太郎。満月の夜に月へ戻っていくかぐや姫。日本の物語には同様の円環構造が頻出するが、厳密には円の始まりと終わりは決して交わらない。永遠の螺旋運動の中に、日本人は無常という思想を見出した。

絆 *liens*

「ちがう、友だちさがしてるんだよ。〈飼いならす〉って、それ、なんのことだい？」「よく忘れられてることだがね。〈仲良くなる〉っていうことさ」

王子さまの問いにキツネは、「飼いならす」とは「仲良くなる」*créer des liens*（絆を創造する）ことだと答える。交わらない円環を生きながら、何ものかに自分を結び付けねばおられない衝動。そのかすかな可能性と希望の結び目を、キツネは、「飼いならす」という賢者の言葉遣いで掬い取り、幼い私の前に差し出してくれた。

本当に「難しい本」なのだと、何巡目かの読書を経て今は良くわかる。この本を飼いならし、私もまたこの本に飼いならされる日があるのかと思いながら、巡り来る桜の季節を待つのである。

（元教授・造形芸術）

能面　白色尉（はくしきじょう）　筆者作　2016年

美の旅

谷田貝雅典

本作は、能面師水谷先生に師事し、兄弟子半沢先生のご助力の下、三年間打ち続けた末に、完成した面である。

「翁」という能の演目は、「能にして能にあらず」といわれ、別格に扱われる祝言曲である。特に翁舞の源流を汲む「一色能」では、舞台にお神酒が奉られ、演者はそのお神酒を頂き身を清めて舞う神事である。

私も、面を打つ際、五穀豊穣の時代に感謝しつつお清めをたくさん頂きながら、微笑翁な師匠と、豪笑翁な兄弟子の下で、笑顔の絶えることのない泰平を実感する時を過ごさせて頂いた。

（教授・文芸メディア）

西村史恵　「桜」（造形芸術コース2018年度卒業制作、さくら賞受賞作品）

第131号　主目次

第1面　トップエッセイ
美の旅
大学随想
第2面　特集
「新入生必見！大学生活アドバイス」
卒業生コラム
第3面　イベント記事
心象点描
第4面　各セクションから

〈今号の一言〉

「大学は友だち作りのプラットフォームではありません。」

（学生・TM）

大学随想

アニメで一躍有名になった児童文学作品は数あれど、『フランダースの犬』はその代表格である。

孤児のネロ少年は、貧しいながらも画家になることを夢見て、大好きな絵を描き続けている。そんなネロに好意を寄せるのは、村の長者コゼツの愛娘アロアである。しかし、コゼツは絵を描くということに何の価値も見出さず、ただでさえ貧しいネロがろくに仕事もせず、遊び惚けていると決めつけて、アロアをネロから遠ざける。

物語の終盤、ネロは仕事を失い、おじいさんが亡くなり、小屋も追い出され、愛犬パトラッシュとともにホームレスになる。

唯一の望みは、絵画コンクールに出品した自作が入賞して、画力が認められることであったが、落選に終わる。そして、クリスマスイブの夜、見たくても見られなかったルーベンスの絵画を大聖堂で見ることができ、希望が叶えられた喜びの中、パトラッシュと抱き合ったまま天国に召される。

死の直前、ネロはコゼツが落とした全財産入りの財布を見つけ、アロアの母に届ける。コゼツは改心し、ネロを引き取る決心をする。

こういう筋書きである。

はたして、コゼツがネロを引き取ったとき、コゼツは絵を描くことにまで価値を見出しただろうか。全財産が戻った喜びが色あせてきた頃に、再びネロに厳しい目を向けることはないのか。

一方、大金を拾っても謝礼金を求めないネロは、お金の重み、恐ろしさを理解していたのか。なぜネロは、コゼツを軽蔑しないのか。

この小説を表面的に読むと、神格化されたネロの美談・悲劇で終わってしまう。しかし、絵とカネという二つのキーワードで読み直すと、別なものが見えてくるように思える。

（中本恭平・教授・英語英米文学）

特集
新入生必見！大学生活アドバイス

新入生の皆さん、入学おめでとう。教職員も先輩学生も心から歓迎します。

とはいえ、入学の喜びもつかの間、初めての大学生活にたいする不安があることでしょう。

そこで、今号は、新入生向けの特集。先生や卒業生、そして先輩学生からの数々のアドバイスを送ります。

何はともあれ、最初が肝心。アドバイスを参考にして、幸先の良いスタートを切ってください。

孤独と自己投資

福田　收

社会的動物たる人間は、「縁」という相互存在の結節点、たとえば血縁・地縁・社縁等々によって偶然の必然化が惹起され、現代はそれに加えてネットという「電子縁」なるものも機能している。特に承認欲求が強い、つまり「いいね」と言われたい連中は、この「電子縁」という結節点だけが全てのような生活をしている場合もある。それをとやかくは言わないが、逆に、だからこそ自分ひとりの時間を大切にし、その時間、自分に何を投資するのか、じっくりと考えてみて欲しい。己が使う羅針盤は人から与えられるものではない、自分で作り、メンテナンスするものなのだ。

ところで、脳科学に基づく合理的な授業の受け方を知っているだろうか。君たちの多くは、スマホが手放せない日常を送っているだろうが、実はスマホに触れている時、ギャンブル好きな大人がパチンコ店に入店し、大音響のなかに身を置くのと同じ脳内環境を形成している場合がある。つまり、前頭葉の活動の波が平坦になっており、講義を受ける時は、少なくとも脳の血流は増大し活発化しているのでなければならないとなれば、講義中にスマホに触れる行為は、単なるイライラを収め、つまらなさを解消してくれはするものの、講義に対する脳の活動は全く以って不活発となってしまうわけで、これでは内容が頭に入ってくるはずもなく、単なるノート取りマシンでしかないことになる。

そのノートの取り方についてだが、大学の板書は高校までのそれとは全く異なる。最初は面食らうが、徐々に板書がテキトーに見えてきて、ノートもテキトーでいいことに慣れてしまい、そのうち学生手帳などにメモする程度となってしまうことがある。だが実は、ノートというものは、君たちが最高学府に席を置き、確かにそこに存在していた理由を証明する一つに他ならない。担当者が書き殴る板書は一瞥でいい、あとは担当者の発するコトバと、コトバならざるコトバ（身振り手振り・繰り返し・強調等々）を全身で受け取り、それを自分の手指を使ってコトバ化するのだ。そこでは様々な自分だけの記号表現を駆使する必要も生じてこよう。そんな時間に誰かと繋がっている暇などないのだ。（板書を一瞥することに付言すると、スマホのカメラ機能は有効である。とはいえ、無音モードで利用、しかも担当者に許可を取っておく必要がある。）

まぎれもなく講義に出席している時間は、自分ひとりの孤独な時間、いや、孤独と化さねばならない時間である。そして、授業のみならず、日常生活においても、自己投資はいつも孤独な時間に行われるものなのだ。

（教授・文芸メディア）

卒業生からひと言

山岸いづみ

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

私は文芸学部の卒業生で、現在学生課（学生相談室）の職員として働いています。その立場から、三点ほど、アドバイスをさせていただきます。

第一に、どんな時間も自分次第で意味のあるものになると考えてほしいということです。

私は八王子校舎が完成した頃に大学生活を送っていました。高尾駅からスクールバスに乗り、往復約四時間を通学に充てていました。スマホもパソコンもなく、通学の間は、本を読んだりレポートを書いたり友人とおしゃべりをしたりしていました。

八王子校舎にようやく着いて掲示板を見ると、当日の休講のお知らせが出ていることがよくありました。そんな時は、校舎の他には何もなく、緑の山々を眺めながらのんびりと過ごしていました。

入学早々のある日、教室で時間割表を広げていると、後ろに座っていた先輩が声をかけてくれ、単位の取りやすい授業を教えてくれました。その先輩とは、今も交流が続いています。

私の過ごした時代は無駄に思われる時間が多かったのですが、その時間が勉強や友人との関係を密度の濃いものにしてくれたと、今は思えます。

二つめは、興味のある分野、得意な分野に挑戦してみてほしいということです。

共立には約五十の公認学生団体（サークル）があり活動しています。他学年・他学部の学生と交流することで、友人の幅も広げることができます。イベントや日々の活動を通して、これから社会に出ていくために必要な力が自然と身に付くようになります。

私は学生時代、書道部と華道部に所属していました。卒業後も趣味として細く長く続けています。大学時代に何か一つ生涯を通して続けられるものを見つけてください。

三つめのアドバイスは、ストレスを上手に発散してほしいということです。

新しい環境の中で、ストレスを抱えることが多くなります。自分に合ったストレス発散法をいくつか持ち、こまめにストレスを発散しましょう。悩みはためず相談上手になりましょう。

最後はアドバイスというより、お願いが一つあります。

大学での様子を、保護者の方にこまめに伝えてください、親元を離れている場合は、とくにです。電話でもメールでも何でよいと思います。一番心配してくれている身近な方に現在の貴方の様子を知らせてください。きっと安心なさることでしょう。子どもからの連絡は何より嬉しいものです。

文芸学部での四年間が実り多きものになることを、心より願っています。

（学生課職員）

心構え

◆推薦で来た人や第一志望が共立だった人はまだしも、希望大学の受験に失敗してやむなく来た人や、何となく入ってしまった人は、とりあえず自分の好きなことを見つける旅に出たほうが良いと思います。まず行動して色々やってみることです。その中でいつかきっと良いチャンスや縁があるはずです。

（二年・SK）

◆私は苦手なことを避けてきました。我ながら、どこまで臆病なのかと心配になるほどでした。それを大学に入ったら変えようと思いました。まず音楽系のサークルに入りました。それから、勢いで共立アカデミーや留学生との交流ボランティアにも参加しました。自分に、参加したくないという選択肢を与えず、不安や緊張があっても、もう遅い！と自分に言い聞かせました。結果として、そのすべてが自分の成長につながり、自然と苦手なことを克服できていました。

（二年・FS）

◆大学生は、個人プレイの自己責任です。友人と一緒でなければ授業に出ないというようなスタンスでいると、後々痛い目に遭います。

（三年・HM）

◆大学生になったら、家計簿を付けましょう。私はお昼代から遊びにかかったお金、ちょっと買ったお菓子代まで付けています。それで、無駄遣いをしなくなり、いざという時に金欠、ということがなくなりました。スマホ用の家計簿アプリがたくさんあるので、使いやすいものをインストールしてみましょう。

（二年・KM）

◆私は上京して一人暮らしをしています。ほぼ初めて家事全般をこなさなければならなくなりました。大学生活はとにかく自由ですが、そういう生活力を身に付けるという意味でも、とてもいい機会です。

（二年・SM）

◆入学してしばらくは、電車での通学が大変に感じると思います。ここ神保町は都内の中心部なので、通勤・通学時は地獄の満員電車になります。とくに背が低めの人はつかまる所がなかったり、死ぬほど潰されたりします。なるべく混まない車両を選ぶ、混みそうな時間帯を避ける、などしないと、通学だけで体力をごっそり持っていかれます。

（三年・MH）

◆入学してすぐの頃は、授業開始三〇分前には登校していました。それが今では、開始五分前になってしまいました。しかも教室ではなく本館入口に、です。エレベータにはなかなか乗れません。長い時は二、三分、待たされます。そして教室に着くのは…、毎日ヒヤヒヤです。大学生活に慣れてくると、ギリギリの時間を攻めるようになりがちですが、せめて十分前行動を心掛けましょうね。

（二年・SS）

◆私は、サークル活動もしなければ友だちも少ない四年間でした。というのも、ダブル・スクールをしていたので、そういう時間がとれなかったからです。それでも、後悔はとくにありません。やりたいことのある人は、具体的なビジョンを作り、行動に移すことを勧めます。何か目的や土台があるだけで、地に足が付くし、視野も広くなります。四年間は意外と短いものです。

（卒業・YS）

今号を一さつ・今々・あした一

律に魅せられて

髙橋京子

昨年10月、劇団匂組による『律女立つ』（第30回テアトロ新人戯曲賞最終候補作）を観劇。主宰者であり脚本を執筆したのは、卒業生の大森匂子さんです。

タイトルの「律女」は、俳人・正岡子規の妹。当時としては珍しく、二度も離縁されている、いわゆるバツ2。

舞台は、出戻ってきた律が母・八重、兄・子規と三人で暮らす正岡家。ここに出入りする夏目漱石、秋山真之、中村不折、高浜虚子など、子規の弟子や友人等が織りなす日常が鮮やかに映し出されます。

魅せられたのは、律の生き様です。離縁された深いキズを胸に秘めつつ、カリエスを病む気難しい兄、子規を献身的に介護し、最期も看取ります。なんとその後、30歳を過ぎてから、共立女子職業学校に入学。卒業後は教師の道へ。たった、遅い！　明治時代にこの時代は脚本家として青年座の文芸部に在籍後、結婚出産を機に主婦業に専念。子育てが一段落した頃、再び演劇の世界へ。60代で大学院に入り演劇学を修め、劇団を旗揚げ。以来、毎年新作を生み出し、芝居を打っています。

本作の終盤、共立への入学を決めて一歩踏み出す律の姿は、大森さんの姿と重なって見えました。リスクも覚悟のうえ、自ら決めて踏み出す―その潔さ、しなやかさ―もしやこれぞ〝共立スピリット〟！と胸が熱くなりました。

それは今も脈々と受け継がれているはず。きっと私にも、皆様にも、そして未来の共立生にも。

（一九八九年卒業）

脚本『律女立つ』掲載誌
『テアトロ』2018年7月号

授業

◆大学では、授業をある程度自由に選ぶことができます。どれにするか迷うかもしれませんが、最初は自分の直感を頼りにすることを勧めます。というのも、大学は自分で学びを見つける場だからです。当たり外れはあるでしょうが、興味の薄かった分野でも、触れてみたら案外面白いということがあります。それが卒論や就職にまでつながるとしたら…と想像するとワクワクしませんか。迷ったら、自分にちょっとした博打を打ってみてください。（四年・IA）

◆授業を選択する時は、シラバスをよく読むべし。とくに成績評価の方法のところ。自分の得意なところを評価してくれそうな授業なら、受けるのが楽ですし、成績も良くなりやすいですから。シラバスも役に立たず、先輩情報もない場合は、「みん活」というサイトがおススメ。授業のクチコミページがあります。（四年・KM）

◆大学生活において大事なことは二つ。一つは、レポートは早めに取り組むこと、もう一つは、授業の出席状況は常に確認しておくことです。レポートを期日前に一気にやろうとすると、私のように何徹夜もするハメになります。出席は確認しておかないと、つい欠席が多くなり、単位を落としてしまいます。（二年・NC）

◆大学に入って勉強の仕方が変わりました。大学のテストやレポートでは理解度が重視されるので、内容をきちんと理解しておく必要があります。そのために、授業中に板書を写すだけでなく、自分なりのメモをとるようになりました。そのおかげで、内容が理解でき、自分の書きたいことをスムーズに書けるようになった気がします。（二年・HA）

◆語学に関してアドバイスです。大学の授業では高校よりも難度の高い勉強をすることができますが、週に二回しかありません。必修以外の英語の授業も履修して、毎日勉強していないと、今まで培ってきた内容も忘れてしまう恐れがあります。大学ではあくまでも自分一人の力でコツコツと学習しなければいけないと念頭に置いておいてください。（二年・YA）

◆文芸学部に入って、おもに文学について学んでいますが、授業をとおして、ふだん何気なく使っている言葉にも様々な意味があることに気付くようになりました。友だちと雑談している時にも、「あ、これ、授業でやったな」と思えるようになり、改めて日本語の面白さと難しさを実感しています。（二年・MH）

課外活動

◆複数のサークルを掛け持ちし、そのうちの一つを途中で辞めてしまった私からのアドバイスは一つ。サークル選びは慎重に、です。その時のやりたい気持ちだけを先行させてしまうと、後々の生活に大きく影響します。もっとも多忙な時期に体調を崩してしまいました。誰とは言いませんが…。（二年・KM）

◆私はこの一年で、短期間働けるアルバイトを探し、三つ経験しました。飲食店、ゲームセンター、ドラッグストアと、違うジャンルの仕事をして感じたことは、幅広い年代の人と関わることで、自分のコミュニケーション能力を高めることができました。この経験はこれからの大学生活や就職活動にきっと役立つと思っています。（二年・SA）

◆サークルに入らなかった私は、アルバイトに明け暮れてしまった一年でした。アルバイトはお金はもらえますが、生活習慣が乱れる原因になります。そのせいで、授業の単位も落とすことになりますから、気をつけてください。（二年・HY）

交友

◆学内の友人・先輩という「情報源」は、多く持っていたほうが絶対に良いです。授業の時だけでも、話せる人を作っておくと、欠席した時の授業内容や課題の有無を確かめることができます。（二年・WN）

◆授業には出たほうがいいです。大学ではなく、授業に出る。授業を聞くためではなく、直接誰かと喋るためです。SNSなどをとおしてではなく。共通の話題が提供される授業という場は、友だち作りにすごく便利です。（三年・KH）

◆一年生必修の基礎ゼミナールのメンバーとは、高確率で仲よくなれます。ゼミを選んだ時点で、共通の好みを持っている可能性が高いからです。思い切ってゼミの隣になった人に話しかけてください。（二年・OE）

◆大学は友だち作りのプラットフォームではありません。高校までと違って、苦手な人とは関わらなくて済みます。人間関係を強制されることはないということです。その気になれば、友だちが一人もいなくても、学生生活に支障はありません。とはいえ、友だちが多いほうが、大学生活は間違いなく楽しいはずです。（二年・TM）

施設

◆本館4階にある学生食堂も売店も、お昼時になると沢山の人が集まります。利用したければ、早い時間に行きましょう。午前十一時ころは、売店に焼きたてのパンが次々と並ぶので、おススメです。パンは日によって種類が違うので、選ぶ楽しみもあります。それと、人気の唐揚げは、お昼すぐに完売になってしまうので、要注意です。（二年・NK）

◆入学して一年が経ちますが、学食を利用したのは二度だけです。学食の席は、お昼になるとすぐに埋まってしまいます。売店も、お昼時は長い列ができます。近くのコンビニも同じくらい長い列ができています。そこで、私は自分でお弁当を作って持って来ることにしました。レンジは学内のいろいろな所にあるので、温めて食べることもでき、昼休みの一時間を、ほぼ無駄にしないで済みます。さらにヘルシーで、女子力が上がる気もするので、良い点ばかりですよ。（二年・AY）

◆おススメの場所は、2号館です。2号館の2階には、ロハスカフェという、おいしくておシャレなカフェがあります。お財布にも優しく、友だち同士でバースデープレートも頼むことができるので、サプライズパーティーにも便利です。また、3・4階の図書館の中には、くつろげるスペースもあります。私は寝不足の時に、そこでがっつり寝ています（笑）。（四年・MH）

◆大学のパソコン室はテスト前になると、非常に混雑し、使いたくても使えないことがあります。そんな時、12階の情報センター隣のパソコン室がおススメです。意外と知られていないので、センターに申請すれば、高い確率でパソコンが利用できます。（三年・TM）

◆神保町にはごはん屋さんがたくさんあります。一〇〇人で手分けしても食べきれないくらいです。（二年・KS）

イベント

助手のひらめき

田口　亜紀

「教育・研究と学生生活をサポートするため（…）最も頼りになる存在であるといえます。」これは現在学部HP掲載中の助手の紹介文だが、実は助手が最も頼りになる存在というのは、教員にとっても当てはまる。その一例を紹介したい。私の企画したプログラムの実施は助手に負っている。

取り上げるのは、研究成果を社会に還元する趣旨のプログラム「フランス語ってどんな言葉？」のイベント。私の研究の土台は仏語で文献を読むことなので、まず高校生に仏語について知ってもらおうと思った。

仏語の母語人口は世界の言語中、十四位（英語は三位、中国語は一位）だが、意思疎通を目的とした国際共通語としては英語に次ぐ二位の地位を占めている。仏語はオリンピックの第一公用語、国連作業言語としても知られる。

国際化の時代に広い視野と、複眼的な思考を身につけるためには、母語の日本語と、義務教育の英語だけでなく、もう一つ以上の外国語を学ぶことが強く求められている。言語には共通語としてのツールの役割があるが、忘れてはならないのは、無菌状態の言語というのは存在せず、言語はそれ自体が文化と歴史の集合体でもあること。人間は言語を通して世界を理解する。複数の言語を学ぶことは、異（多）文化、自分とは違う価値観に興味を持ち、寛容の精神を育むことでもある。多文化共生の時代に多様な外国語へのアクセスが重要視されるゆえんである。

さらに高校生に向かって「仏語が話されているのはフランスだけではない」と実感してもらうにはどうしたらいいか。これがこの企画で頭を悩ませる問題だった。

フランス語圏はヨーロッパ、カナダ、カリブ海、アフリカ、中近東など広範囲にわたる。中でもアフリカでは仏語が公用語になっている国も多く、共立でもベナン国の留学生を受け入れている。

そこで素晴らしいアイデアを提案してくれたのが助手だった。左の写真を見てほしい。助手がいなければこの企画自体が存在しなかったのである。

（教授・仏語仏文学）

千葉助手（昨年度末で退職）撮影、セレクトによる展覧会。パネルの写真説明も担当。

井野元助手作成の「フランス語圏を旅しよう！ フランコフォニーすごろく編」。世界地図上に双六のマスがある。ルールの説明も井野元助手が担当。

心象点描

モノがたりをつないで

杉村使乃

いくつになっても新しい出会いはあるもので、特に「先生」と呼べる人との出会いには事欠かない。殆どは偶然、というか、新しいことを始めたら、こんな素敵な人に会っちゃいました、というパターンが多い。

昨年の出会いは何といってもお茶の先生。私の場合、着物への興味がお茶に繋がる。半世紀生きたせいか、古いものが愛おしくなってきて、母の着物をリユースするべく着付けを覚える。なまじ自分で着られるようになると、今度はでかけたくなる。着物繋がりから、先生の雛茶会に誘われる。その日はそろそろ締め納めの梅の染め名古屋帯がきまらず、もう行くのは止めようかと思ったくらいだ。

誰も知り合いのいない待合は居心地わるく、雛祭りの設えに目を向けていると、同じ着物姿の人に声をかけて貰い、気持ちが和む。懐紙に乗った薄桃色の花びら、その下に透ける楕円の白餡。その幻想的な花型を求めて、先生は合羽橋まで赴かれたのだそう。

お菓子とお茶のマリアージュに胃袋をつかまれ、気さくな先生のもてなしに魅せられ、翌月には門を叩いていた。

お菓子と器をこよなく愛する先生のお稽古は毎回がワンダーランド。新しいことを始めると使う言葉が変わる。これまで器を語るのに「景色」という言葉を使ったことがあっただろうか。焼成したときにできる土や釉薬の変化、使われている間にできる染みや大小のヒビなどが、手のひらに収まる宇宙を描く⁉器の歴史を知ると、逸品ハンターの骨董商人の失敗を描いた「猫の茶碗」、義理堅い武士と屑屋のやりとりを描いた「井戸茶碗」といった落語がおもしろくなったりする。学生時代、日本美術史の課題のために行ったきりだった根津美術館など、素通りしてきた界隈が新しい目的地となる。ガラスケースの前で立ったり、しゃがんだり、後ろにまわったり、触った感じを想像したり…、フェティシズムの何たるかを遅ればせながら知る。

ある日、その前の週に先生が見せてくれたおろし立ての粉引きの白い茶碗が何やら緑の泥をまとって放置されていた。すぐにはそれとはわからないが、胴に斜めに走る楔形の模様には見覚えがある。なんでも新品の茶碗に少しでも早く趣ある「景色」を作るために濃茶を塗りたくってあるとの説明。アンチ・エイジングの対極！　そう言えば、市川猿之助が茶を点てながら「忙しいときこそ汚したくなる」と骨董について語っていた。

食洗機〇Kの器が大好きだった私が、作り手と使い手が刻む物語に心揺さぶられる今日この頃である。

（教授・英語英米文学）

挿画：渡部　直

（専任講師・造形芸術）

コースから

日本語日本文学

二〇一九年三月三一日付で、退職した齋藤です。こんにちは。

今年度より、齋藤の後任として着任する杉本助手が、川﨑助手と共に日文を支えていってくれることでしょう。

ということで、みなさんがこの記事をお読みになる頃には、齋藤はもう此処にはいません。学生生活も含めると、随分長い期間、お世話になりました。

この長い間に、自分にどれだけの変化があったかは分かりませんが、先生方やみなさんは何か感じることがあるかもしれません。それがプラスであることを祈るばかりです。

さて、日文ではコース委員を中心に、日本文学演習I履修者を対象とした研究旅行を企画してきました。例年は春休みに行なっていましたが、今年度より企画内容や時期など、変更になる可能性が大きいです。助手も含め暗中模索になるかと思いますが、みなさんで力を合わせて、ステキな旅行にしてください。

最後に、齋藤から一言だけ。時間だけは全人類平等です、自分がやりたいと思えることに時間を費やしてあげてください。以上です。

（齋藤）

英語英米文学

一年生の皆さん、入学おめでとう。充実した四年間を過ごすため、日常的に英語に触れる機会をたくさん作ってください。映画を見たり音楽を聴いたり、小説を読んだりと、英語英米文学の世界に繋がる道はたくさんあります。その道をどんどん歩いて、知性と感性に磨きをかけましょう。

嬉しいお知らせがあります。満谷マーガレット名誉教授が *The Emissary*（原書は多和田葉子『献灯使』）で二〇一八年度全米図書賞翻訳書部門を受賞されました。満谷先生に教わったことがある人も多いと思います。原作を日本語で、翻訳を英語で読む楽しみを味わってください。

専門の授業が本格的に始まる二年生、卒論について考え始める三年生、就活と卒論執筆の両立が求められる四年生。読書の楽しみを忘れずに、自分の「好き」をたくさん見つけましょう。

四月から、浦野郁准教授が育休を終えて復職します。澤岻明香助手が退職し、コースの先輩である新任助手二人も加えて、英語英米文学コースは総勢七名になります。十四階の研究室に、ぜひ気軽に足を運んでください。

（沼田）

フランス語フランス文学

仏文コースでは、毎年研究旅行を行ってきましたが、今年は二月から三月にかけて、初めてフランスで実施しました。題して「パリとノルマンディー：歴史と文学の聖地を巡る旅」。

二十数名の学生が滝沢先生と井野元助手に引率されて、フランス文学ゆかりの地を訪れました。実際に風土に触れることで、フランス文化をより深く理解する機会になりました。

一月十九日には、フランス大使館主催の「読書の夕べ」で、仏文コースの学生四名がラマルチーヌ、エリュアール、プレヴェールなどのフランス詩を朗読しました。

ちなみに、同じ催しに教員も元教員もゲストで参加しました。元教員というのはジャニック・マーニュ先生。武藤剛史先生の最終講義にフランスから駆けつけられたのです。

武藤先生は一九七六年から四三年間在職され、三月に退職されました。また、研究室を支えてくれた千葉しほみ助手が退職されました。学生に慕われ、教員が頼りにする存在で、信念を持って仕事をされていました。新しい環境でのご活躍をお祈りしています。

（田口）

劇芸術

劇芸術コースでは、永らく共同研究室で教員と助手が協力して学生諸君のサポートにあたってきました。現在の1405室は、阿部先生と私、そして助手2名のスペースですが、村井先生と土田先生の机もあり、会議や面談の他、芝居の話や様々な雑談を楽しんでいます。会話の輪に学生が加わることも珍らしいことではありません。ここを心の拠り所にしてきた学生や卒業生は、数え切れないほどいます。それは助手さんたちの力に負う所が大きいのですが、私達教員も、その姿に接して多くのことを学んできたのです。

その劇芸術研究室も、この夏休み中の工事で3つに分割される予定です。だからといって基本が変わるわけではありません。舞台芸術は人と人との一期一会の出会いの中にこそ成り立つもの。それを学ぶことも同様です。

私の個人研究室は、轟悠さんの写真以外は極力私物を置かず、共有のスペースとするつもりです。私自身は助手さん達の仕事の邪魔をしながら過ごします。

本や雑誌、DVDなどの貸し出しも従来通り行ないますので安心して下さい。

（鈴木）

造形芸術

Feel first, learn later.

美術は見ることから始まります。絵画でも彫刻でも、写真でも建築でもデザインでも、あるいは人の姿や街頭の様子、自然の風景でも、見ることがなければ美術はありません。

何かを見るとき、同時に、人は何かを感じています。きれい、汚い、やさしい、こわい、明るい、暗い、うれしい、悲しい等々。感じることは、日常の中で一瞬であっても、立ち止まって自分自身を振り返ってみることにつながります。「私は美術のことはわからないので。」、そう言う人はたぶん、感性が鈍くなっていて、何も見えないからそう言うのではないでしょうか。

何かを感じ、立ち止まって振り返るだけでも意味がありますが、それだけなら、感じたことは泡と消え、後には何も残らないかもしれません。そこでもう一歩踏み出して、見た物について、見た作品について、見た自分について、考えを巡らしてみて下さい。何を表現しているのか、どうやって表現しているのか、自分や他の人にとってどんな意味があるのか。

そうした問いの積み重ねがすなわち学ぶことであり、学ぶ姿勢を持つことは、大学を離れても、生活の様様な局面で役に立つでしょう。

（池上）

文芸教養

〈アーサー王伝説におけるラーンスロット像〉、〈スーパーボウルハーフタイムショーから見るアメリカの現在〉、〈近代女性の化粧行動と美の変化〉、〈印旗沼龍伝説の特異性〉、〈天使の姿〉、〈アートプロジェクトの被災地応用～東日本大震災を例に～〉、〈アートによる社会的弱者へのエンパワメント〉、〈家族がつくれない人の話～桜庭一樹作品における家族のかたち・『私の男』を中心に〉、〈「歴女」とは何か〉、〈『きらきらひかる』の世界―食物、人物、音楽を通して―〉、〈『封神演義』における妖怪〉、〈ストリートダンスの発展とメディア〉、〈「悪女」の表象―『痴人の愛』、『ロリータ』、『悪い娘の悪戯』の装丁を通して〉……。

二〇一八年度の卒業論文のなかから、特色あるもののタイトルを並べてみました。現代から古代、西洋から日本を含む東洋まで、文芸教養コース教員はそれぞれ自分の専門・関心領域に引き寄せつつ、学生ひとりひとりが興味あることや好きなことを知的に掘り下げ、学問として接することを手助けできるよう、日夜努めています。

（福嶋）

文芸メディア

新年度、新たな出会いがたくさんある季節ですね。その中で『こうありたいな』と思える人との出会いは、宝物のような経験です。

私にもそう思う友人がいます。彼女は、人に対して自然に気を遣え、自分の芯もしっかりとした人で、同い年ですが、本当に素敵だなぁと、会うたびに思います。

ある時、仕事をする上で気をつけていることという話になり、彼女は「相手が先輩でも後輩でも、その人がどうしたら仕事をしやすいか考えている。」と言いました。相手が仕事をしやすいように、ほんのちょっとした仕事の依頼でも、伝え方やメールの書き方を工夫しているそうなのです。〝相手の立場に立って考える〟。子どもの頃から教えられてきたことですが、年を重ねると忘れてしまう人が多いと、社会に出て感じます。私自身も彼女の言葉で気づかされました。

考え方など、全く同じにする必要はないかもしれませんが、人の言葉で気づくということは、とても大切なことのように思います。

大学生という社会に出る前の貴重な時間に、学生の皆さんにとって素敵な出会いがたくさん訪れますように。

（野際）

学部長から

本学のホームページには、文芸学部の学びの特色として、「よむ」「きく」「かく」の三項目があげられています。

ところで、「よむ」「きく」「かく」と続くと、何故「はなす」がないのか？と疑問に思うかもしれません。文芸学部では、ゼミでの学びを重視していますし、ゼミに口頭での発表は付きものです。また、最近よく耳にするアクティブ・ラーニングでも、学修過程におけるインタラクティブな「対話」が重視されています。それにも関わらず、文芸学部の学びの特色から、「はなす」が（こう言ってよければ）あえて外されているとすれば、ここには何か意味があるはずです。

以上の例が適切であったかどうか分かりませんが、このように、「へぇー、そうなんだ」と分かった気になって通り過ぎてしまうのではなく、いったん立ち止まって、それは何故なのか？と問いを立ててみることが、学問のはじめの一歩です。

では、あらためて。文芸学部の学びの特色は、何故「はなす」を欠いているのでしょうか？　このブランク（空所）に、文芸学部が考える、文芸学部ならではの学びの本質があるはずです。

かりに、皆さんが高校生であれば、それは、「これこれこういうことなんのです」と、私が偉そうに説明してしまったかもしれません。しかし、正直に言ってしまえば、じつは私自身も、この問いの正解を知りません。

というより、ここには「たった一つの正解」があるわけではなく、その答えはむしろ、皆さんが自分自身で、文芸学部での学びという具体的な「経験」を通じて、それぞれ見つけていくものなのです。大学で学ぶとは、そもそもそういうことだと思います。

……と、こう言いながら、以下は余計なお節介ですが、この問題、「よむ」「きく」「かく」とひらがな表記であるところに、何か深い意味がありそうです。

（教授・深津）

教職課程から

教職をめざすみなさんへ。文芸学部の教職課程は、学部設立の理念に沿ってコース制を充実させる中で、免許教科種を広げてきました。当初は日文＝国語、英文＝英語、造形＝美術、仏文＝フランス語というふうにコースと取得可能教科が固定されていましたが、その後共立文芸ならではのコース制に立ち戻ろうと、免許教科とコースの固定を解き、どのコースからもどれか一教科の免許が取得できるようにしました。

その後「メディアになる私」をコンセプトに立ち上げられた文芸メディアコースの科目を柱に、女子大文系学部では珍しい高校情報の免許課程を加えて現在に至っています。国語、英語、フランス語、美術のどれかの中高一種免許と情報の高校一種免許のセット取得も可能です。

ところでこの度「教育職員免許法施行規則」の一部が改められたのを受け、今年度一年次生の科目区分が、現二～四年次生に適用されているものから大幅に変更されました。しばらくは入学年度によって異なる複数カリキュラムが混在します。履修登録は各自の『履修ガイド』に沿って間違いなく行いましょう。

（葉椰子）

『文學藝術』

学生の皆さんは、『文學藝術』という雑誌を知っていますか？おそらくほとんどは、見たこともお聞いたこともないでしょうね。

文芸学部の教員を中心として執筆・編集し、年一回刊行している雑誌です。昭和四二（一九六八）年に創刊され、今年で、もう第四二号になります。

固くて難解な専門の論文を載せたものではありません。学生でも興味を持って読めるように、易しく書かれています。

誌名のとおり、文学と芸術に関することを取り上げていますが、ポイントは毎号、設ける特集テーマ。それに関して、いろいろな分野から捉えたエッセイが集まった、まさに文芸学部的な読み物です。

今号のテーマは、「童」。「童話」や「児童」の「童」です。各コースの先生方が文章を寄せていますが、さて、「童」に関してどういうことを取り上げているのか、読んでみたいと思いませんか。

大学の図書館にも置いてありますが、個人的に欲しいという学生は、先生か助手さんに問い合わせてみてください。数に限りがありますが、無料で進呈します。

（研究促進委員会・半沢）

異動

〈退職〉

武藤剛史 教授（仏語仏文学）
下村陽子 教授（文芸メディア）
山本聡美 教授（造形芸術）
齋藤恵 助手（日本語日本文学）
澤岻明香 助手（英語英米文学）
千葉しほみ 助手（仏語仏文学）
髙山玲菜 助手（文芸教養）

〈新任〉

鴇田拓哉 准教授（文芸メディア）
杉本千穂 助手（日本語日本文学）
奥山晴香 助手（英語英米文学）
御子貝紀 助手（英語英米文学）
西村彩 助手（文芸教養）